

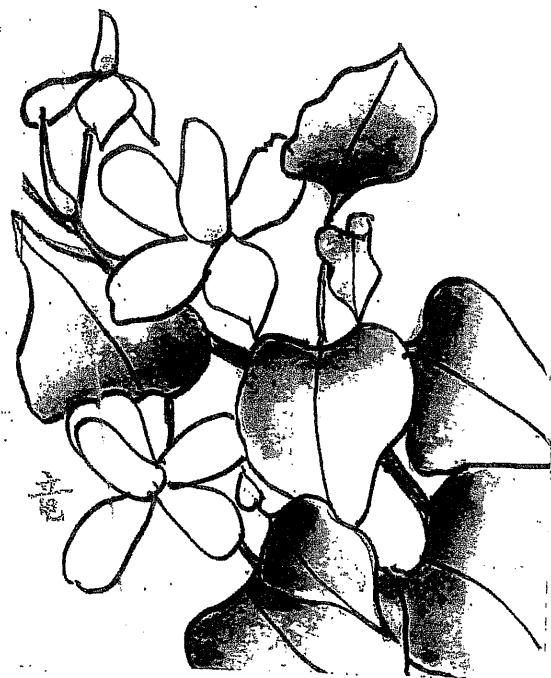
オリーブの樹

第154号

2021年7月19日

شجرة الزيتون

早期釈放！重刑策動をはね返し、重信さんを支えていこう！



世界の中
数多難民
見捨てられ
同情薄うぐ
ヨリ時代は

目次

- P 2 パレスチナの5月に 重信房子
- P 4 春の歌 重信房子
- P 5 独居より 重信房子
- P 12 戦士たちのリッダ闘争 重信房子
- P 17 リッダ闘争49周年—1972年と私 岩田吾郎
- P 18 リッダ闘争49周年集会報告 大越輝雄

パレスチナの五月に

パレスチナのナクバの日から73年目の5月を迎えていました。

リッダ闘争から数えても、もう49年目の五月、来年は、リッダ闘争50周年を迎えます。正直なところ、自身が生きて、50周年を迎えるとは考えられませんでした。

あの時代の世界・正義の座標軸のある世界に生き、連帯は連帯を呼び、斗い方次第では勝てる、また勝ち得た人民革命の正義が私たちを熱くした時代です。PLOは、アラブの中で封建的社會から民主主義を示す羅針盤の位置にありました。あの時代は、チェ・ゲバラの言葉と共に蘇ります。

「二つ、三つ、さらに多くのベトナムを！それが合言葉だ」「もし我々が空想家のようにだ言われるならば、救いがたい理想主義者だと言われるならば、何千回でも答えよう。そのとおりだ、と。」

時代に生きる情熱の中で主観的で一方的な「使命感」は日本の中で「武装闘争」に活路を見出そうとした誤りもありました。しかしこの誤った路線を内包しつつパレスチナという戦場と出会うことで私たちは再生したのです。あのリッダ闘争の72年、日本では「連合赤軍事件」「沖縄返還」と時代の空気が転じつつありました。

でも、パレスチナではチェ・ゲバラの言葉は、パレスチナ、アラブ、欧、米、ラテン米、アジアそして日本のボランティアたちの共通の連帯の言葉として生きていました。

リッダ闘争からさらに国際ゲリラ戦によるイスラエル攻撃へと続く72年です。

斗い方や、正義の価値は、それぞれの地の歴史や文化、伝統の中で育まれています。そのことに無頓着・無自覚なまま無媒介に私たちは斗いました。

その結果、リッダ闘争はアラブ・パレスチナ、世界の一部人民の「賞賛」で迎えられつつ、他方には糾弾と非難に晒されてきました。

パレスチナの大義に自らを溶解させることを厭わず、パレスチナの正義に貢献した若い戦士達を誇りとして私は再びこの五月を迎えていました。

あれから49年目のこの五月、パレスチナはやっと「利権政治」を超えてイスラエル占領に抵抗することを第一とする政治の変化の兆しがありました。

15年ぶりの5月22日のパレスチナ立法評議会（PLC）選挙、16年ぶりの7月31日の大統領選挙、8月のパレスチナ民族評議会（PNC）選挙が予定されていましたからです。

今回のPLC選挙は、パレスチナ自治区（エルサレムを含む西岸地区とガザ地区）を一つの選挙区とする「比例代表制」をとっています。

選挙区有権者280万人のうち93%の260万人が登録しました。有権者はPLCの132議席を選ぶために、立候補の団体リストの一つのみを記入します。そして投票総数に比例して団体リストの議席が割り当てられます。（ただし、7議席は、少数派のクリスチャンのために予め割り当てられています。また、投票総数の1.5%に届かなかつた団体は議席の割り当ては得られません。）

立候補者の資格は厳しく、2003年改正のパレスチナ基本法を含む様々な条件があり、28歳以上という年齢制限や選挙費用の負担など、若い市民活動家などの新しい勢力は立候補できません。

それでも3月31日の立候補締め切りには、36団体1389人がリストを提出し大きな混乱もなく選挙への道が掃き清められました。

ところが、4月29日、アッバス大統領は「イスラエルが占領下東エルサレムの選挙実施を許さず拒否している」ことを理由に国際社会にも訴えず、いとも簡単に選挙の「無期延期」を発表しました。今、この五月、丁度ラマダン下のパレスチナでは、エルサレムのアルアクサ・モスク礼拝を妨害するイスラエル軍と斗いながら、同時に自治政府への抗議も又溢れていますことでしょう。

もともとイスラエルの妨害は予測出来、おりこみ済のことだったからです。アッバスたちファタハ主流

は、世論調査で確実にファタハがハマースに勝利できると分析し、一月に選挙実施を表明してきました。しかしファタハの中から「反乱」が起きて勝利出来ないとわかつて「無期延期」の挙にでたのでしょう。アッバスら「ファタハ」のリストの他に、アッバスより遙かに入望のあるマルワン・バルグーティとアラファトの甥でアッバスに更迭されたナセル・キドワが組んで団体名「フリーダム」のリストが提出されたからです。

加えて、アッバスと激しく利権を争い追放されたモハメッド・ダーランの率いる団体「未来」もリストを提出。ファタハ支持票は分散し、アッバスは勝利出来ないです。

ファタハ中央委員会とマルワン・バルグーティ(マルワン自身は数度の終身刑を科され収監されていて、夫人が代理) ナセル・キドワの3者の間で数週間にわたって、3月31日の立候補締め切り時間ギリギリまで交渉し一本化をめざしましたが出来なかったのです。

86歳のアッバスは、大統領職をマルワン・バルグーティに渡したくなかったのでしょう。

2006年のPLC選挙にも、マルワン・バルグーティは「独立リスト」を提出し、ファタハは大混乱しています。のちにバルグーティがリストを撤回したので、ファタリストはひとつになりました。しかし、この混乱も影響して、2006年は、ハマースが勝利しています。

今回も候補者条件締切日から4月一杯、ファタハ主流派はバルグーティらにリスト撤回を求めるまくいかなかつたのでしょうか。その結果、4月29日の「選挙無期延期」に至ったと考えられます。

この決定は、占領地併合、入植地拡大の過酷な政策を続けるイスラエルにとって願つてもない決定と言えるでしょう。

コロナ禍の今年のパレスチナの五月は、ラマダン(断食月)を迎えてます。

ネタニヤフ政権の支援をほしいままに悪質化したユダヤ人入植者たちが、人種差別を繰り返し、パレスチナ人の住居や所有地の占拠を企み、オレンジや、オリーブの木を引っこ抜き切り倒し、パレスチナ人を銃で狙撃しています。またネタニヤフ政権のワクチン政策は、ワクチン接種率を誇る一方で、ジュネーブ条約に基づく義務を果たさず、占領下パレスチナ住民に対するワクチン接種を排除しています。

ラマダンの聖地エルサレムのアルアクサ・モスクの礼拝を妨害されたり、エルサレムの自宅を追われるパレスチナ住民の怒りは臨界に達しています。

国際社会、ことに米欧政府、アラブの親米反政府の無関心を装ったパレスチナ問題の周縁化は、結局イスラエルを許し国際法、国連決議の形骸化をもたらしています。

パレスチナの5月、ただパレスチナ人自身の力が、この空気を改める力を持ちます。その行動は再び国境を越えるアラブ民衆とともに立つ力となります。

自治区のみならず難民のパレスチナ人を含む全民族的な大胆な変化によって一丸になって反占領の新局面を拓かなければ、パレスチナ住民の一人一人がこれまで以上に犠牲を強いられるのは目に見えています。

リッダ闘争の戦士たち、數えきれないパレスチナの戦友、戦士に思いを馳せながら、このパレスチナの5月に、選挙再開を含む大きな反占領のアクションが始まることを願つてやみません。

2021年5月7日 記

来年のリッダ闘争50周年を皆と共に乾杯することを願つて。

ストップ虐殺！イスラエルの人種差別・虐殺に抗議する。ガザへの無差別空爆侵略に抗議する。悪辣な入植者と一緒にイスラエル政府の進める東エルサレムパレスチナ住民の追放・民族浄化に抗議する。イスラエルを支持・支援する米政府に抗議する。占領者イスラエルと占領に抵抗を強いられたパレスチナ人をテロリストとして葬り去ろうとする企みに抗議する。私は抑圧された人々と共にありたい。故にパレスチナのすべての抵抗の闘いを支持し連帯する。

怒りのナタバの日に

春の歌

重信 房子

三陸の波にたゆとう魂魄の叫びに寒月海に落ちたり

終章の筆定まらず虚空見る日本を発ちて五十年目に

刑務作業終えたひと時を刺激してシモナス・ヴェイエの固き論読む

花巻美は亂調に在りて謂いし大杉栄の大笑い聽こゆ

春三月湖にたゆとう花残も上弦の月も揥うてみたき

柘榴よりざつくり零れるルビー色食みつ照れつ初恋語りて

哀しみの器のようすを後姿二人もやられしパレスチナの母は

ミヤンマーの死傷者因姿見つめられ殺戮止め得ぬ世界の良心

アーネストの真紅に染まる草原に笑い声高く三月の戦士ら



休居よい 2月8日～4月30日

オリンピックでも、コロナでも、もはや自民党政治では正しえない

重信 房子

2月8日 資料の中にいろいろな新左翼組織などの年頭表明があり、読んでいるところです。現実と見通しと現在の労働運動の生死を示すような明確な論説は「コモンズ」に載っていた、武建一さんの「年頭あいさつ」から学び実感しました。あたりまえだった労働組合の要求やスト権も「犯罪」とされています。

カシマ
とされている現実。中小企業と関生が協同して大企業の収奪と闘う、対抗社会のロールモデルとして存在していることが許せない国ぐるみの権力の戦略的攻撃。それに抗してコロナで震わになった資本主義、新自由主義文明を転ずる勢いを読んで感じます。

今のところ、コロナは友人近辺で罹患したという話は聞きません。ほっとしています。やぎ農園のチーズが日本一の最優秀賞をとったとか。長年の努力のたまものです。「季刊アラブ」もバイデンの中東政策を特集していて、交付受けました。学習したいもの一杯で、時間が惜しい毎日です。

2月12日 北側の房に移ってから、陽が当たらないため外も見えず寒い。ズボン下2枚、タイツ、それにパジャマをはいて、八王子時代のような格好。カイロを毎日使いうようになって手を暖めています。今日の新聞で森五輪組織委員会々長、やつと辞意。川淵氏を指名し、川淵氏より相談役を求められて相談役に就くとあります。日本の女性差別と権威主義の連鎖。まずもって、安倍政権時代からオリンピック「自民党開催主催」のように、一方的に森と財務官僚の武藤をトップにもつてくるやり方から始まり、すべて勝手に決めて上意下達。「女性蔑視」とは、さらさら考えてもいない森を含む人々。「表現がまずかった程度の考え方。山下氏以下無能な人々も同じです。海外の抗議や国内の女性たちの抗議に「辞意」は不本意ながらのこと。日本社会がさらされているのは、森氏が後継

指名している姿に示される封建家父長制の思想の姿そのものでしょう。「民主」や「男女平等」も、この程度の日本。更に問題をこじらせそうなことを平気でやる自民党と菅政権にはあきれます。菅政権は人々の心とかけ離れた政策ばかり。

2月15日 Oさんからのお便りで、12/8から45日間入院中だったと知りました。九死に一生の命拾いでした、とあります。生還を祝し、生き延びてほしいと願っています。三陸の地震、やはり被害大きく、しかも今日は雨。何とも過酷。コロナ対策しつつの避難所も大変な様子。

2月16日 資料、本などが届き乱読中。今日は、味岡さんからの「テント日誌」「監獄人権センター」のニュースレター（刑事施設のコロナ感染と対策実情興味深い）「月刊靖国・天皇制問題情報センター通信№198」「紙の爆弾3月号」「暴力暴言型社会運動の終焉」「創」2月と3月号、「中東研究№540」中東資料一式、他冊子など。株価3万円台。安倍政権時代のGPIFの株式購入比率を上げ、日銀のマイナス金利、コロナで更に市場での金の流れ、ちつとも景気を反映せず、異常社会を反映していると思います。人々は生活苦、自殺まで増大している倒産と失業時代に。

2月17日 肺炎の予防接種の問診票を記入し、午後、主治医診察時に接種をすませました。

2月18日 資料などいろいろ受けとりました。「日本と世界反戦・反貧困・反差別共同行動イン京都」の冊子や、私の前に書いた「2021年パレスチナ解放闘争・中東の新たな動き」、Tさんの「パレスチナ解放闘争史第2部」の評論やその他「鹿砦社通信」「治安フォーラム2月号」「文春」「婦人公論」「ハルメタ」その他。購入した「若さは心臓

オリーブの樹 第154号

から築く」の本も届き、どんどん読みつづけています。リベラシオンが送って下さったTさんの「パレスチナ解放闘争史」の中の「90年代をふりかえって」の批評は、ていねいな文でありがたく拝読。Tさんの文章の特徴「何々主義」の断定口調のいつものではなく真摯なものですが、90年代を「ソ連東欧の社会主義国崩壊冷戦終結 資本主義の世界体制に変わっていく 90年代～」の私の文に前提から相入れない問題の立て方を知りました。いわく「ソ連・東欧体制の崩壊は、『社会主義国崩壊』ではない。ソ連帝国主義の崩壊と東ヨーロッパの独立。悪いことではなく、よいこと。」「アラブ社会主義」は社会主義ではないなど、あるべき社会主義と違うので、社会主義国とは認めないという論調です。現実に人民革命を経て社会主義制度のもとに存在してきたのですから変質しつつも構造的には、社会主義国であったと思います。帝国主義とは同一視出来ないし、アントだつて反帝戦略であったように現実の国際関係の中で果たして来た役割もちがいます。何故変質していったのか? 帝国主義との攻防ぬきにも語れません。「無謬」のあるべき社会主義で切り捨てるに、生きた人間社会の内在的な総括にならず、観念の納得になってしまうのでは? と思いつつ読みました。今後の社会主義の展望を再形成する要は法の下に党を置く人民主権を戦略的に実現する指導勢力にやつぱりかかると実践実感的に思っています。何を言うかより何をするかと。記されていることを読みつつ現実的でないな…と思ってしまう私です。でも問題提起をありがたく思っています。

2月19日 リンピック組織委会長は決まりましたが、オリンピック強行出来るのか? 自民党主催の姿かわらず。安倍時代からオリンピック政治利用は続いたまま。不思議なのは、何故ワクチンが自給出来ないのか? 長年の国家政策のミスが原因です。何故、注射器がる人分だ、6人分だと今更なのか? そんなことばかりの日本の現在です。

2月25日 パレスチナではアッバス大統領の選挙令をめぐって、政治的闘争が続いている様子。ディリースター紙(レバノン)は「選挙令の呼びかけは彼の政治的未来を危険にさらし、米国政府

と関わりつつハマスとの修復、加えて彼の手に負えないアタハが崩壊するのを防ぐために余儀なくされた措置」との分析。パレスチナ政策調査研究センターの所長カリル・シキカはアッバスが選挙をキャセルまたは延期し、イスラエルはハマスを非難する可能性を述べています。「しかしそれらの口実を与えないならば、アッバスは強制されて選挙に行かなければならないだろう」とも述べています。米欧はハマスに3原則(イスラエル承認、過去のオスロ合意などの承認、武装解除)を求めており、ハマスを認めない可能性もあり、85才のアッバスは統合力を失っています。2月21日声明で選挙に懷疑的だったPFLPも参加を決定したようです。選挙実施を巡る協議が合意に至るのか注目しています。

2月28日 今日は日曜日。50年前この国を出発して、パレスチナ解放闘争に学び共に闘かおうとペイルートに向かった日です。“一炊の夢にはあらず我が旅路涙と血潮の尊き日々あり”と一首が零れます。奥平さん、安田さん、日高さん、丸岡さん他パレスチナアラブの戦友たち、多くが彼岸へと旅立ち、私や同世代の友人たちもまた、その途上にあると改めて思います。それにしても劣化し続ける国際社会、パレスチナの戦いは厳しく、強権に満ちた権力は日本も同じ。変革の兆しを探したいのだけど……。

3月2日 森本さん浅川さんらの歌会の資料も届きました。三首選んでみてとあり、読みました。全30首からこんな歌が好きです。“降りしきる御霊の雪かひたすらに蝦夷地の無念誰も知らない”“埋め立ての不正をその日も訴えて夕べ息絶えし男の炎”“若人も負けてたまるかコロナ禍に掛かって来いと睨みを効かす”一首目は思想的に、二首目は命がうかび、三首目はリズム感が好きです。“歌会に揃いたる歌どの一首もいざ闘わんと訴えており”と零れます。“殺されし戦の被害を語れども加害の歴史知らぬわがもの”“暴動、蜂起、騒動いずれでもいのちの雄叫び五〇年前”などもあります。

3月3日 今日の昼食時8グラムのひなあられが、

5センチの小さな袋で添えられていました。午後は和尚が法要に見えて、土曜会で積極的に沖縄現地闘争など関わっておられた、生田校舎だった半田さんが一週間程前に急逝されたと知りました。

和尚は彼岸法要、3月13日の遠山さんの50回忌、半田さんの急逝、それに私から吉村先生の追悼もお願いして3月法要となりました。土曜会も柳家三壽さん含め亡くなられる方が……。コロナではないとのことです。私が出てくる頃には世界が一変しているのでは? と和尚も話しています。健康を願うばかりです。

朝日新聞の記者から、去年逮捕20年目の取材・掲載ならずで、引き続きフォローしているが、大谷弁護士が公表された私の手紙の中の「紙千切り作業」について知りたい。精神障害作業療法のこと、センターの回答はどうだったのか? 紙千切り作業はまだ現在も続いているのか? などです。オリーブの樹152号にも載っているように、センターの回答は「自分の考えに過ぎない」で「不決定」でしたが、あの回答直前に中止されています。センター全体でとりやめたとのこと。良かったと思っています。“刑務作業終了思考を刺激してシモニヌ・ヴェイユの固き論読む”

3月5日 和尚の差し入れて下さった二月歌会の資料、「月光66号」福島先生のコメントなど、受けとりました。3/1の福島先生のコメント「私が主宰する月例『月光』歌会に重信氏から『三陸の波にたゆたう魂魄の叫びに寒月海に落ちたり』が送られてきた。最高点をとったこの一首に改めて収監中の現在を思った。東北を襲った大津波から10年!”人は生き人は死にゆくそれゆえに戦い傭まぬ重信房子”と詠んでおられます、褒めすぎで恥かしいです。「重信房子『暁の星』(『月光』連載中)が毎回胸を打つ、連赤事件で肅清された遠山美枝子を、「雪山に倒れし友は老いもせず若さのままにわが胸に棲む」と歌い世界の悲惨を「コロナ禍のシリア難民憂う春雪舞う三月開花宣言」と嘆ぐ。“雪の舞う三月開花宣言の春を祈らば暁の星”と評して下さっています。批評・励まし過分な言葉で、私に短歌を人生の伴侣のように導いて下さっています。凡作でも作歌の歓びが、いつも湧きます。66号の「月光」は、これから読むところです。

3月9日 2/25号人民新聞に「金儲けの道具と化した遺伝子組み換えワクチン」という一面の記事に、なるほど! と、とても目を開かされました。ジョン・ル・カレのベストセラーで映画にもなった「ナイロビの蜂」は1996年にナイジェリアでファイザー社が実際おこしたスキャンダルがモデルだったと知りました。新抗生素開発のため「人道援助」を装って子供たちに人体実験。危険な治験をやり犠牲者続出で有罪。でもナイジェリア政府を買収した話。ワクチンのからくりも、とてもよくわかりました。ネオリベラル勢力にとって保健医療分野は教育分野に並んで最後の市場化のフロンティア。コロナ禍の弱肉強食。税金は、ワクチンより公的医療インフラの改革整備など公共部門に投資すべきで製薬資本の壇に入れではならないと医師重光哲明さんは語っています。彼は「集団免疫原則」に則った医療体制整備を求めています。

今年も枝垂れ梅がみごとに咲いたと、庭の写真をEさん送って下さいました。庭に出て昨日までと違う新しい花が咲いたのを発見している様子。とくに黄色の花の春。立金花・菜の花・福音草。ムスカリもヒヤシンスの蕾も。ミモザは3月8日女性の日の花を思い出しています。ステキな庭、みごとな梅です。心に想像して楽しんでいます。

3月11日 再び、あの大地震災の日が来て10年目。闇死、行方不明含めて2万2192人の人々の死を改めて思います。今も4万1241人が避難生活のまま。そして福島第一原発の廃炉作業はなりたたず、汚染水も行き場なく、海へ棄てるための世論の動向を窺っている政権。テレビ、新聞の一人一人の10年の人生の話の、どれをとっても涙が湧いてしまいます。なんとしても原発を廃止しなければと、決意を新たにすべき3.11です。

3月12日 遠山さんの命日12日。詠んだのは“セーターを取換えっこして再会を誓いて会えぬ君の命日” “海に月煌めく港ヨコハマで恋打ち明けし友連赤に死す”など。「無題」の歌会があるそ

うです。“春3月湖にたゆとう花筏も上弦の月も
揺らうてみたき”“陸前の津波登りし荒れ川の花筏
海へとゆっくり下る”月光66号を読んでいたら一
か所誤植。7首目「書面左と囚人写真」→「正面
左と～」です。

3月15日 今日は「支援連ニュース420号」受けました。「狼をさがして」のドキュメンタリー映画上映のチラシも同封されていて、この映画が日本でも上映されることを知りました。「東アジア反日武装戦線—狼、大地の牙、さそり—1974年、日本を搖るがした20代の若者たち」の今日までを捉えた映画です。監督、プロデューサーは韓国のキム・ミレさん。「東ア」の人たちが何故闘ったのか?「反日」「武装」の意味を追いつつ新しい視座を拡していく優れたドキュメンタリーのようです。韓国でも、すでに賞を得ているとのこと。この「支援連ニュース」に、キム監督のインタビューや、シム・ジョンさん(独立研究活動家)の韓国からの通信も載っていて何故この映画を撮るに至ったのかもよくわかります。韓国での日帝植民地支配の歴史と「東ア」の闘いが、クロスして、今目的意義をもって語られています。「東ア」の作戦で逮捕された人々が、支援の仲間たちと、「刑務所に閉じ込められることによって結ばれた関係」を得たこと。それがこのドキュメンタリーの訴える力になっているようです。コ・ビヨングオンさんの言葉が印象的です。“東ア”的人たちが持ち歩いた青酸カリが社会や人々との関係や言葉への

不信を象徴している。孤立も凝縮もあったが事件後結ばれた強力で堅固な支援連との関係こそ、武装しない反日武装戦線、武装を解体させる武装戦線、二番目の戦線であると述べて、“その爆発力をソウルまでもたらしたのは、今まで彼らを支援してきた多くの人々だと思う”と語っていて、心に沁みます。ぜひいつか見たいです。

3月19日 Yさんからの「遠山美枝子さん50回忌法要墓参写真報告」届きました。コロナ禍の今回は入数を絞って数人としたようです。墓苑の上に到着すると素晴らしい見晴らし。法衣のN和尚が法要の道具を準備し、墓前にはお花と遠山さんの写真、供物はバナナ、いちごやお茶とお菓子。焼香の準備を整え線香に火をつけて、和尚の誦経が静かな墓苑に流れます。供花が風に微かに揺れて墓参を喜ぶよう。順番にご焼香。以上のような文と共に写真がたくさんそれに掲示貼付されていて、墓参の様子がわかります。ありがとうございます。

Iさんからの資料など届きました。丁度知りたかったパレスチナ選挙などの資料もあります。これから読みます。今年は春が早いようです。じきに満開があるので、今頃は満開でしょうか。「地域アソシエーション」「ニュースレター」も受け取りました。受け取った「治安フォーラム3月号」に「令和2年過激派四大ニュース」の記事があります。①中核派議長・清水丈夫の半世紀ぶり登場②革マル派周辺で変事発生(分派闘争仕掛けの「探究派」の出現)などなど。公安警察関係の月刊誌、共産党分析もあり、時々もう20年前解散の私たちの言及ありと、当局側の思惑もわかるので興味深い。

3月23日 ベランダの隅に濃紫と薄い紫の二種のスミレ発見!「スミレよ!」みんな集まって「きれいい!」「春らしい花見だね!」とニコニコ。小嵐さんが送って下さった新著だったのですね。先日から「検査中」とのことと昨日「一部抹消の上交付」に同意し署名して今日届きました。「ここは何処、明日への旅路」という題の本。扉には「出所した党派初の“軍人”を待っていたのは、組織の分裂——」とあります。社青同解放派の経験を活



かした小説のようです。どこが抹消?と見ると、101P 6~7lの一文が黒く抹消されています。刑務所服役中の話です。「~外部の業者がわざわざ残した煙草の吸い殻をマッチやライターはないので~」以下黒線。多分危険事項として抹消したのでしょうか。

『救援623号』は強烈です。足立さんの「狼をさがして」の映画批評もいいのですが、まず横浜刑と手葉刑のコロナクラスターとそのデータラメさに恐ろしくなります。救援連絡センターが弁護士らと横浜・手葉刑に抗議の行動を起こしています。受刑者たちからの率直な報告が何人から寄せられていて、あまりのひどさ、大手新聞やTVでも目に出来ない真相を知ることが出来ます。横浜ではリスク承知で密接な狭いスペースで、一日約十回毎日工場で二列に並び「いらっしゃい! さん! しー! いらっしゃ~」と大声を上げて走らされたり、運動させられるひどさ。たちまち感染でもマスター一枚のみなど。感染した受刑者も寄稿していますが、大変な危険の連続です。ひどい。自由に自身を守れない受刑者に……。

当センターはさすがに病院で厳しい予防体制がとられています。でも患者布製マスク二枚なので、洗って使用する仕組み。私は元々気管が弱いので、医師の許可で、自費でマスクを購入し、不織布のものを使っています。布製は感染防止力が弱いのでは?と思いつますが……。

3月25日 福島から聖火リレーが始まったとのこと。オリンピック開催に反対だが、やるなら少なくともプレコンバックの前を通り、アンダーコントロールではない本当の現実を見せること、それは無人地帯を走ることでもあります。上辺だけのもりあがりの強行。オリンピックは本当に望まれてはいません。世界を見ても、日本を見ても。聖火リレーと共にコロナが再び、の世界なのに。「オリーブの会通信」が届き、今年の「土地の日」は太田昌国さんのお話を知りました。

3月26日 友人の送ってくれた奇譚パリ物語届きました。ネットでも出てるんですね。「僕の音楽芸能物語」として連載とか。「僕」は、45年前の

27才渡辺プロ(当時最大の芸能プロ)社員。海外シンガーの担当で10才位のノアム・カニエル君、初のフランス人歌手の宣伝のためパリ取材へ。ところが、実は、ノアム君は、イスラエル生まれで、フランスで少年歌手として活躍していて「フランスの子供」としてレビューした。74年『マン、踊ろうよ』が代表作で、『セリポップヨリボップ』がヒットとか。ともかく来日前のパリの学校での勉強風景を撮影することになった。学校の門の中には機関銃の銃座にびっくり。撮影の黒板の前にノアムを立たせると、その黒板の不思議な文字を消した。そして先生が書き直したが何故か?不明。校内の子供達が僕を取り囲み、フランス語で、サインを求めてきた。その子供たちは「オカモト、オカモト!」と叫んでいて、僕は何のことかわからない。どうか僕の着き目の戸惑った姿を想像してほしい。笑って下さい。『サインしたか?』って? 誰もわからず僕は当然『岡本』って、山のようにサインしましたよ。さて岡本さん、こんなすごい事件があつたんですよ。(トリッダ闘争を説明) 2011年には、頭脳警察のパンタと、『岡本さん』は、ペイルートで会ったとのこと、ウイキペディアにあります。ですって!え?です。ユダヤ人の子供だったのか、イスラエル生まれのパレスチナ人だったのか……。

「未来」や「人民新聞」で読んで知っていたのですが、「維新」は住民投票で破れたにもかかわらず「都構想」代案の詐欺的手法で大阪府・市の事務一元化を可決したこと。何の為の住民投票だったのか……。愚弄しています。

3月27日 バイデン大統領就任後初のホワイトハウス会見。「対中国の同盟強化」と、更に対立を先鋭化させそうです。中国の人権抑圧をいうなら同じ価値で、イスラエルの、パレスチナ人の人権弾圧、サウジアラビアの国民抑圧と同じ重さで表明すべし。同じように、iranの核を問うなら、イスラエルの核を問うべし、です。ダブルスタンダードのレトリックは、日本では、大新聞中心に、ちつとも問題にされません。

3月29日 デジカメ歌人の「春分曆」は、ムス

カリの花！「^{くきわら}叢に瑠璃色のムスカリが野生化する」と、キャプション付き。地中海沿岸が原産地でイラク北部のネアンデルタール人の墓に遺体と共に花粉が大量にみつかったとのこと。ムスカリの花を敷きつめていたのだろうと、あります。冬から春、ペルー高原の春告花はムスカリです。この写真のようになれば美しさ。ジェラシ山岳地帯にもたくさん咲いていました。

^{ざんごう} 塵壟の司令部室にカラ葉きよう

一輪挿しのムスカリの花
という風景もありました。
デジカメ歌人の春を呼ぶ歌、
砂川を湖より上の鯉の影
ゆらゆら群れなす春進むなり
我がちに他人を押しのけ身をよじり
のたうち絡む鯉戸騒ぐ

3月30日 「土地の日」のパレスチナ。今、イスラエルの総選挙、ネタニヤフのリクードが第一党勝利再びのようです。パレスチナの人々は、反占領の闘いを更に強いられるでしょう。バイデン政権にエールを送り、イスラエルとの共同を始めてしまったアッバス自治政府は、5月選挙を迫られ、どうしているでしょう。今日はまた、ユセフ・檜森の命日。あの2002年も満開の桜吹雪で、その下で彼は命を断ったのですが、同じような日。

春爛漫桜吹雪を浴びながら
己の身を焼く人の真心
いろいろな思いが浮かびます。

4月6日 この間、体調を崩してしまいました。4月4日（日）から寒気と関節痛、頭痛でロキソニンを朝と夕一錠服用。それでも治らず（月）も朝一錠服用して朝8時45分の刑務作業へ整列。ところが、とても胃が痛くこれまで丈夫な胃だったのに、どうしたのだろう……、と不安。胃薬と診察をお願いし症状を聴き触診した主治医は、「ロキソニンが強い薬で、胃を荒らしたのでしょうか」と。「でもとても痛いんですけど」と言うと、痛いものだそうです。夕方から胃薬をもらい、今日は

大分良くなりましたが。ロキソニンの副反応か、便通も止まり腸に支障のある私は、四苦八苦。今日は、ずいぶん良くなりました。

3月16日に、パレスチナ勢力13組織（ファタハ、ハマス、PFLPやPFLP-GCも含）が、The Carter of Honor（名譽憲章）を採択し、パレスチナ選挙の原則が決められたようです。

4月14日 「アンダーコントロール」は結局、始めから海への汚染水放出の醜態。米国のOKを得ての発表でしょう。「汚染水放出」の英訳を「ラジオアクティブウォーター」から「トリーテッドウォーター」などと呼称まで希釈するとは……。トリーテッドウォーターなんて何のことか不明でしょう。菅政権は福島の現場への説明に行かず、呼びつけただけで発表。菅政権は、「バイデン政権の初の首脳ゲスト」と銘打って、前のめりに「ケアドド」など、実体的に集団自衛アジアNATOの動き。訪米で益々従属構造が深まる気配。それにしても、ワクチンにしろ何にしろ、即応力のない内閣・行政機構。コロナ・ワクチン対策も「フクシマ」や「3・11」の失敗を繰り返しています。菅政権は、国民の心も掴めず、人びとの心とかけ離れた政策ばかり。願望を発表しては、混乱を作っている元凶では？

先日「フクシマ50」をDVD日曜番組で見ました。事実に基づくドキュメント風。米国の「ともだち作戦」が、やたら賛美されたり、首相や東電首脳はマンガチックで。吉田所長役は、怒り怒鳴りまくったり、うーんでもありました。これまでテレビもなく、全く視覚的に3・11を知りえなかつたので、当時の流れをよく知ることが出来ました。TV5:00～7:00（土、日曜13:00～15:00）もの他（日）、（土）には映画をやります。「鬼滅の刃」や「スターウォーズ」なども。でも、時間がないので見ません。今回「フクシマ50」を初めて見ました。月替わりの映画メニューです。

「治安フォーラム」を読むと、公安警察の見方がよくわかります。もう20年も前に解散し、「後期高齢者」の私さえ、危機感のよう。「組織」は無いのに「ある」とし、「リッダ闘争50年」や私の「出所」まで危機視し、「重要なJRAの2022年」と8か。予算獲得と話題に欠けているので、70年。

代の闘いを持ち出して若手教育しているのでしょうか。

4月16日 今日ベランダに出ると草が刈られてしましました。ポピーの蕾もスミレも消えていました。「いやがらせのよう！」と残念がりましたが……。白いツツジが3、4つ花を開きはじめていますが「雑草」の中、花はすべてなくなってしまいました。

Mさんがエルサレム支局の朝日新聞4月4日日曜版で高野遼記者が書いた記事に、抗議の呼びかけのコピーを送って下さったとのこと。グローブ版や夕刊(3/29~4/2)のパレスチナ関連記事内容が残念なものでしかないと指摘されています。去年から読売が読みなくなって、朝日との読み比べが出来ないのですが、朝日のパレスチナ記事、特にエルサレム支局発は読売よりも評価できません。読売は事実関係をきちんと記しますが、朝日は主観的理屈中心の記述が多く、朝日の大好きな「喧嘩両成敗論」が多いのです。送って下さったもの読んでみます。朝日記者は、イスラエルのワクチン賛美より、シオニストネットワークでシオニストのユダヤ人アルバート・ブーラ米ファイザーエコがネタニヤフとタッグを組み「ユダヤ人を救い」「治験データ個人情報提供」の二人三脚でパレスチナ人を踏みつけにしてワクチン宣伝・外交をしていることをもっと書くべきなのに……。

4月22日 Mさんの資料届きました。「被占領ゴラン高原についての高野遼氏の記事に関する抗議と要請」で、朝日新聞、GLOBE編集長、高野遼3方への宛名です。ゴラン高原がシリア領の占領地であるのに、併合(イスラエル 1981年、米2019年併合承認)を追認するような記述の繰り返し。「御社は一体いつから国連憲章に背き、軍事力による領土の獲得を容認するようになられたのでしょうか？」と問い合わせ、第一にBDSジャパンとのオンライン協議などで説明を、第二に記述の訂正記事を、第三に訂正には入植地ビジネスに関わることは倫理的、法的に問題があることを明記することを求めています。日本外務省ですらその点を踏まえているのに、朝日のエルサレム支局は歴代イスラエル政府の色メガネで報じることが多い。



こうして一つ一つきっちり過ちを指摘し、訂正を求める大きさを改めて学びます。4・9 文科省前行動の写真、Iさんの演奏中の写真もあります。

4月28日 久しぶりのコーラス。「よろこびの歌」と東北大震災で学校の先生がつくり、各地で歌われているという「幸せを運ぼう」と「花は咲く」。1時間は瞬く間に受け取った本「ザ・空氣3」は戯曲、永井愛さんとのもの。現在の政権の、リアルなエピソードを風刺しつつ、ひねりもあってとても面白く読みました。「私が原発を止めた理由」元裁判長の樋口英明さんの著書です。率直な文に感動して読みました。原発が許されない理由は、第一に、原発事故のもたらす被害は極めて甚大であること、第二に、それゆえに原発には高度の安全性が求められる。第三に地震大国日本において、原発に高度の安全性があるということは、原発に高度な耐久性がある、ということに他ならない。第四に、我が国の原発の耐震性は極めて低く、第五に、よって原発の運転はゆるされないと。水戸巣さんが「問題は、知識ではなくて論理である」と書いておられ、その通りだと著者。この観点から専門知識を連ねて被告側が正当化する論法に乗らずの、根本の考え方・論理で英断を下した判断の過程も述べています。「耐久性の低さを正当化できる学問的根拠はなく、原発の運転を続ける社会的正当性もない」ことを明らかにしています。「3・11」で、現実を知った以上、「無知は罪、無口はもつと罪」と行動し始めたようです。それまで原発は安全だと思っていた自らを語り、発言し続ける今の心意気を語っています。裁判所、裁

判官のあり方批判を含めて率直に明かしていく興味深いものでした。

4月30日 早くも四月尽。和尚から5月12日法要面会の知らせを受け取りました。和尚もTさん同様、年男で5月が祝バースデーです。でもそんな話は「法要」に限られてできません。

「かりはゆく」40号、「アジア新時代と日本」も交付されました。“主張「米中新冷戦」日本はどう対するか”バイデン外交の評価、「新冷戦」の日本にとっての意味を問う、など同感です。アッドは西のNATOの役割を負わされ、情報戦、空、海レベルでは二国間から集団化への道を進んでいます。

「日本にとっての意味」は逆に「世界にとっての意味」から見ればよくわかります。菅首相訪米首脳会談は、米国の対中戦略に一番乗りして進むと「世界宣言」したものです。その一方で、経済界はその覚悟ではなく、お得意の「親米曖昧外交」で進もうというものが自民党路線でしょう。日本は、地政学的条件を歴史的に総括し、アジアの中の友好的関係を築きえないできた根本に立ち返り、善隣外交を掲げて、米・中対立に違ったイニシアチブを発揮する時です。オリンピックでもコロナでも3・11以降、ボロボロ出てきている政治と行政の制度疲労、劣化、もはや自民党政治では正しえない、と変化、変革を求みたい。

戦士たちのリッダ闘争

重信 房子

森孝雄）の記録などを辿りながら、ボランティアの嚆矢として、パレスチナの闘いに参加した最初の日本の若者の姿を記しておきたい。

目次は1、パレスチナから京都へ 2、バールベック神殿の庭で—サラハとの出会い 3、様々な変化の中で 4、戦士たちの葛藤 5、オリードとユセフ 6、オリードの死 7、決断 8 出発 9、闘い—非難と称賛 10、それから—反省と共に

1、パレスチナから京都へ

「まだ国内の本部から何の連絡も無い？」バーシム（奥平剛士）に聴かれた。あれは1971年6月初めのことだったと思う。「本部」とは当時の日本の赤軍派指導部のことである。1971年3月からパレスチナ解放戦線（PFLP）のボランティアとして参加していた私たち二人は、違った分野で活動していた。そのため、時折会っては相互の活動、状況を報告し合い、また日本との連絡などを話合いながら、活動も軌道に乗り始めた頃である。

バーシムは希望通り軍事訓練に入り、イスラエルと国境を接する南部レバノンでの駐屯を経て、「アウトサイドワーク」（注1）の指揮下で活動はじめた。バーシムは自分が訓練に参加できることで、日本の仲間たちにも訓練はすぐ必要だ

リッダ闘争の日、5月30日を再び迎えている。来年には50周年、半世紀を数える。当時のパレスチナの武装闘争による解放闘争の時代と、「オスロ合意」を経たパレスチナの政治闘争の時代は違うし、世界も大きく変化した。しかしイスラエルの占領と併合は変わらぬばかりか、ますます占領と併合、弾圧を悪質に強化している。日本では決して受け入れられなかつたこのリッダ闘争は、当時の戦時下にあつたパレスチナ人民・アラブ諸国のイスラエルに対する戦闘行為の一つとしてあつた。そのPFLPの闘いに日本人義勇兵が参戦したものである。

戦争は例外なく民間人をも巻き込み犠牲を強いいる。この闘いもそうであつたし、立案・戦術上の限界もあつた。しかし、今も續くイスラエル軍の祖国占領と弾圧に晒されたパレスチナ・アラブ民衆にとっては、イスラエル・シオニストに一矢報いた闘いとしてパレスチナ全人民ばかりか、アラブ政府・人民の称賛を浴びたのもまた現実であつた。日本とアラブの反応の違いに無自覚であつた当時の自身の未熟さを反省と共に掘り返している。

あの時を知る者として、当時の彼らについて語ってほしいという要請を時々受ける。私が知ることは少ないが、50年目に向けて、彼らへの追悼の意味でも思い起こし記すことにした。私の記憶・記録や、また当事者の一人であったユセフ（槍

ろうとしきりに気使っていた。彼は短い間、赤軍派のS隊（注2）に加わっていた。みなストイックで真面目な仲間たちで、日雇い労働で自活し、学習会、軍事訓練をしながら非公然に共同生活をしていたという。そこでは、軍事訓練といつても尾行を巻く訓練だとか、肉体を鍛えるなど初步的なものだったという。仲間同士では、よど号ハイジャック（注3）で朝鮮に行った連中が銃などの扱いを学び、いつか戻って教えてくれるだろうかなどと、観念的な傾向で実用的に自衛隊に入隊して技術を習得するという考えはなかった。自衛隊は反革命軍なのだからと。

「赤軍兵士」「武装闘争」の割には本格訓練の機会が無く、残念がっていたのをバーシムは知っていた。「あいつらに数ヶ月訓練させてやりたい」と常々話していた。そこで、バーシムはアウトサイドワークピューローの責任者ワーディエ・ハダード、通称アブハニと話合い、いつでも日本からの軍事訓練希望者を受け入れると言われたので、日本にその旨伝えて、私たちは答えを待っていた。バーシムは、7月には訓練を希望する仲間が日本から来るだろうと、見通しを立てて訓練ノートを整理していた。自分が受けた軍事訓練を次の人たちが受け継いで、学習出来るようにと準備も進めてきた。

ところが、日本の赤軍派の本部からは一向に返事が無い。私の個人的友人や赤軍派でも遠山美枝子さんらからの便りは届いても本部からは届かない。今では、もちろんその理由は判っている。当時の日本の森赤軍派指導部（森恒夫）は組織を改組し、軍による一元指導のもと、銀行襲撃などの作戦に集中し、その結果、弾圧がさらに広がり、厳しい時期であった。当時の私たちは知りえなかったが、「国際根拠地路線」（注4）をとりやめて、国際部も廃止したのか、何人も国際部から召還して軍に編入していたらしい。

救援の部署から、遠山さんを通して山田孝さん（「連合赤軍事件」の犠牲者の一人）について私に問合せが来たのもこの頃である。「山田孝という者が『赤軍派で去年まで活動していたが、体調を壊して活動を離れていた。重信さんはペイルートへ発ったと知り、自分もちゃんと復帰したい。自分については重信さんに聴けばわかる』と言つてい

るが信用出来るのか？」という問合せであった。私よりも関西で学生運動をやっていた者なら、ブント（注5）中央委員でもあった山田さんを知っている筈なのに、こちらに聞合せるなんて、何か変だな……と思ったが、私はすぐ返事を送った。「初期から赤軍派のリーダーシップをとつていたうちの一人で信頼出来るし、森さんはよく知っている筈だから彼に聴いたら判る」と。私の方は、ああ、山田さんは体調が回復したんだなと、とても嬉しかった。一緒に70年は書記局活動をしていたし、山田さんに子供も生まれて一緒に祝した。脊椎の痛みを繰り返していたので、少し休んだらどうか、と私が言って、私がパレスチナの活動に出発する頃は、活動から遠去かっていた。今から思うと、何とも無念なことに、山田さんがやる気で活動に復帰したことが仇になり、後の肃清の犠牲になってしまった……。

バーシムが返事を待っている頃に、こうした山田さんの件の問合せなど、いくつがあつたが、期待した返事はちっとも届かない。バーシムは、「もう頼って待っていても当てにならないな……。それならそれで、自分の友人たちに来てもらおうと思うが、どうだろうか」と私に尋ねた。「私と森さんの対立から、こちらの提案を無視しているのかなあ……。せっかく訓練の可能性が開かれているのに。でも本部から人が来ても来なくとも、バーシムの友人たちを呼ぶのは、私は賛成よ」と答えた。バーシムの友人たちは京都大学工学部を中心とした仲間たちだった。

バーシムは大学時代初期には京都九条で貧しく差別された人々を支援するセツルメント運動に関わり、その関係から日本共産党系の民青（民主青年同盟）に誘われたが、結局そこに展望が見出せなかつたという。京大闘争が始まり、全共闘として闘いながら、京大パルチザンと呼ばれるノンセクトの闘いの中にいた。小単位の気が合う仲間たちが、生活、労働、学習しながら、戦闘団的な核を各地に形成していく闘い方だったという。京大パルチザンは党派の政治路線に結集するやり方とは違つて、労働・学習・闘争を日常として、互いに結び付き合つてゐる。そのイメージの中心には武装闘争がある。武装闘争を支持しないパルチザンもまた無かつた。土本典明監督の映画「パルチ

ザン前史」が、京大パルチザンの訓練風景を映像化しているが、そこにバーシムもまた映っている。しかし京大時計台闘争、バリケード解除以降、闘いの行きづまりに直面していた。共鳴し合う仲間と日雇い労働をしながら次の方向を持てずにいた。6・9年・9月5日、日比谷野外音楽堂の全国金共闘連合結成大会の後には、日大も東大も指導部が逮捕され、各地の大学のリーダーたちも逮捕され、機動隊導入による「大学正常化」の力づくの制圧、ロックアウトが全国的に続いた。党派の結着することのない論争や大言には共感出来ず闘い方は肌に合わなかつたのだとバーシムは語っていた。

そんな時、パレスチナに行かないと誘われた。「技術者として」行くことを誘われたが、当初から革命や解放の一兵士として戦闘に関わるつもりでいた。そこに何かを生みだせるのではないか? バーシムは仲間たちを集めて、共に再起しよう、自分たちで切り拓けるかもしれないと言い残して日本を発ってきた。

そんなバーシムだから、人間性を奪われ続け、これでもか、これでもかと、日々弾圧に晒されるパレスチナの解放のために自分はいつでも命を捧げると心に決めていたと思う。出発を告げた時、バーシムの父は「人々の役に立つ仕事をするよう」にと彼を送ったという。

バーシムは訓練を急ぎたいのだと私に言った。バーシムはアウトサイドワークの戦士たち、中には拷問によって盲目となった者や精神に障害を来した者も居たが、厳しい闘いと明るい樂觀のパレスチナの戦士たちと良い関係を築いていた。何か貢献せずにいられない気持ちだったのだろう。当

時の私自身も、ボランティアスタッフとしてP.F.L.Pの事務所に通いながら、もっと貢献したいという心情を強く持っていたので、その思いは共通していた。

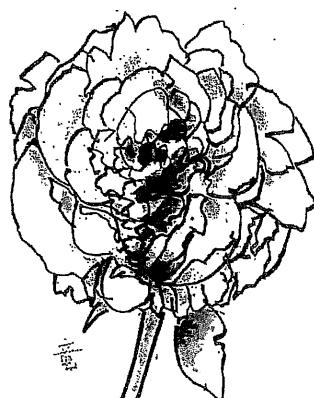
「アウトサイドワークの方から、イスラエル国内の調査が可能だろうかと言われて、日本人なら怪しまれないだろうし、可能だと答えた。国内の自分の友人たちに調査を依頼しようと思う」と、この時バーシムは言っていた。「まずイスラエル調査の上で、ベイルートに入つもらいたいのだ」と言う。

当時、アラブ諸国とイスラエルは交戦・休戦下の戦時体制である。アラブ連盟諸国がイスラエルの建国に抗議して、「アラブボイコット」をずっと発令していた。「アラブボイコット」によると、イスラエルと取り引きする企業は、アラブ諸国での企業活動は禁止。イスラエルに入国したスタンプのある旅券保持者はアラブ諸国への入国禁止である。そのため、ベイルートの日本人会で聞いた話では、イスラエルを訪問した場合、イスラエル入出国スタンプのある旅券は、ギリシアのアテネの日本大使館で新たな旅券を再発行してもらって、アラブ諸国へ入国するという。だから日本を発つてイスラエルに入国した場合、アテネの日本大使館で、バーシムの友人たちも旅券を再発行してもらい、ベイルートへ入る計画が必要だった。

当初、バーシムは、自分が一旦帰国して、仲間と綿密に調査の打ち合わせすることを考えた。でも「別件逮捕」など、何らかの理由をつけられて自分自身が出国出来なくなることがあってはならない。再出国が不確かなのでそれは止めて、安全な方法で手紙を送ろうと二人で話合つた。直接会わずに手紙だけで指示するのはとても難しいが、やってみることにした。当時、ベイルートから投函した私の手紙が税關で開封されたこともあり、重要なことは人の移動に負うことにしていた。

結局、ある友人に頼んで、バーシムの書いた手紙を6月バーシムの友人たちに届けてもらうことにした。

赤軍派の本部からは相変わらず返事はなかつたが、しばらくしてバーシムの手紙の返事が届けられた。人伝てに受けとった手紙は簡潔で「バーシ



ムの意向は諒解した。指示通り仕事を進める」といったものだったという。

バーシムの仲間の一人であったユセフ檜森は、1999年1月20日付文書「日本赤軍創成期をめぐる覚え書」と2002年1月1日付文書「水平線の向こうに—72・5・30リッダ覚え書」を残している。(『水平線の向こうに ルボルタージュ 檜森孝雄』風塵社05年所収)。このユセフの文書と後にバーシムや仲間のサラー・ハ(安田安之)、オリード(山里修)、ユセフと交わした記憶などを辿りながら、当時の戦士たちの動向を描くと以下のようであった。

6月のいつだつたか、バーシムからの手紙とイスラエルのテルアビブ空港(リッダ空港=のちのベンギリオン空港)の案内図や見取図を受けとった。そこには、バーシムの字で様々な指示と調査項目が記されていた。まず三人の人員が必要なこと。三人は、各自が歩幅を毎回同じになるように訓練し、その歩幅を物差として、調査の距離を測定するよう記されていた。

調査項目は具体的で、到着ロビーから管制塔への侵入ルートがあるか? 空港のトイレで旅券を始末出来るか? 手荷物受け取りのベルトコンベアー上のバックから物を取り出したり出来るか? 保安要員の配置や人数、トイレの構造、バックから物を取り出す際などのいくつかの動作が記載されていて、それに空港の保安部隊はどんな反応をするのか?など想定しうるいくつもの空港入国時の調査が記されていたという。さらにイスラエル出国時の調査、またギリシアのアテネ入国、日本大使館での旅券再発給からベイルート到着に至る様々な保安注意や調査などである。そして最後に、この仕事は我々が担うことになるのを自分は希望していると記されていた。

三人は、バーシムの要請に直ちに同意したとバーシムに返事を送った。

京大パルチザンの仲間は、各自が自立し対等な仲間である。同意しなければ、たとえ秘密を知つても口外しないし、撤退もまたありえる。サラー・ハが言うには、世界の抑圧された人々の闘いに、これは我々も貢献出来ると身震いし、三人で結束してやりとげようと決めたという。それから三人は、汗ばむ季節になった京都の街中で、歩幅を揃

える訓練を始めた。歩いては立ち止まり、その都度、互いの歩測距離を確認し合った。7月になつても5.0mの距離で5mの誤差が出る日もあった。繰り返し会合と訓練を重ねて、三人の歩測、目測も一致するようになった。バーシムの手紙と一緒に送られてきたリッダ空港見取図を頭に記憶して、三人は羽田空港からイスラエルへと旅立つた。

こうして三人は、深夜にイスラエルへ入国した。しかし、ユセフ檜森のバックだけ出て来なかつた。ユセフは長髪でズタ袋状の荷物だったので怪しまれたのか。ヒッピー風のユセフに対し、一人はアイビー風、一人はスーツ姿という不拘いの三人組だから怪しまれたのかも知れない。ユセフのバックは翌朝ホテルに届けられていた、中身はバラバラにされていたという。そこに入っていたサラー・ハの辞書が、警告のように一枚破り取られていた。そのページには意味のない書き込みの数字があったという。

初日からこんな状態で、噂に聞くイスラエルのセキュリティの陰の手を感じた。それでも荷物が確認出来たので、観光タクシーでエルサレムに向かった。日本語ではなく、英語やヘブライ語など耳慣れない言葉、初の海外旅行の緊張ばかりか、セキュリティの監視を感じる息苦しさ。嘆きの壁の辺りで三人ともバテて座り込んでしまつた。昼食を食べずにいる質素な三人に、アラブ人運転手が、自分の金で昼食をおごってくれた。アラブ人は、もう何となく味方の気がした。その時初めて、三人は声をあげて笑い合って運転手と話をしたという。親切なアラブ人運転手だったが、何も聽いたり出来なかつた。帰路、キプツ(注6)の住人という若い女性が一人乗り込んで来た。タクシーの中で話しかけられ、適当に慣れない英語で語り、「ナオミ・カムバック・トー・ミー」を一緒に歌つた。でも、彼女がイスラエル秘密警察の筋の者であることは疑いないと、三人共思つていた。だから、ホテルでも車の中でも会話らしい会話は交わさず、緊張と警戒の中で過ごした。

一番リラックスし、遺跡に関心を示していたのはオリードだった。オリードは西アジア史を良く知つておらず、二人に色々説明してくれたが、二人はあまり知らなかつたせいもあるが、気持ちは遺跡どころではなかつたという。オリードは怪しま

れないようにリラックスを装っていたのだと言っていた。三人のイスラエル滞在は緊張していたが、それでも調査の方は三人の歩測・目測はほぼ一致していたのを後に確認している。だが、正確に調査出来たのは空港到着ロビーだけだった。出国の際に撮った空港全体写真を前にもしても、管制塔への進入ルートはおろか、その他の位置取りを判別することが出来なかつた。

アテネに着くと、日本大使館で旅券再発給準備に数日を過ごした。三人でパンテノン神殿を見学し、それぞれ別行動をとつて好きなように過ごした。オリードは生き生きと史跡巡りを楽しんで飽きることなく探索していた。サラーハはあちこちの店をひやかしたり、日本から持つて来た金目の切手を売るために店で交渉したり忙しい。一度はバーで金をふんだくられたりしたらしい。劇場みのメンツ屋や酒場も出来た頃、旅券が再発給された。ベイルートに着くまでは、イスラエル調査の話は一言もしなかつたという。こうして、10月、彼らはベイルートに到着した。

バーシムはすでに活動拠点をバールベックに移していて、時折、乗合いタクシーでベイルートに来ていた。三人の到着のおおよその予定は知っていたので、バーシムは10月にはベイルートで待機していた。

三人が来る前に、私とバーシムの間では、赤軍派が「統一赤軍」(のちの連合赤軍)を名乗り、毛沢東派と一つの軍になったというビラを友人から送られて来て驚き討論していた。毛派との統一には、私たちは、反対しよう。PLOの統一戦線のようなあり方が必要ではないかと訴えようと話合つた。第一、中国の「ソ連帝国主義論」はブントの反帝戦略とも合わないし、中東世界からアフリカでは問題があるとしても、ソ連は人民運動、民族解放闘争主体の大切な後方の役割を果たしていた。パレスチナ解放闘争にとっても、ソ連邦は東欧諸国共々、政治的支援、武器供与、訓練留学、財政援助など大きな支えであった。中国も朝鮮もパレスチナ解放勢力を支援していた。世界的に毛派・ソ連派の分裂の中、闘争主体の強い主体性故か、ソ連と共同するパレスチナ解放勢力に、中国は反対しなかつたし、援助していた。PFLPは中国派ではなかつたが、毛沢東・朱徳の紅軍の規

律「三大紀律八項注意」などを範としていた。PFLPは世界各地でソ連派・毛派と他の国の革命の評価で分裂することを批判していた。そして中国派には与しなかつた。パレスチナでは当時の中國四人組路線は決して評価されていなかつた。

その頃、PFLPの仲間が日本へ出発しようとしていた。若松孝二・足立正生監督が撮ったドキュメンタリー映画「赤軍PFLP世界戦争宣言」の上映に合わせて、パレスチナ解放闘争への理解と支援を広く日本に訴えるためであつた。

そして到着した三人から連絡が入つたその目に、バーシムは彼らと落ち合い、そのままバールベックへと向かつた。

注1 アウトサイドワーク PFLPの部局の一つ。占領されたパレスチナの外からイスラエルの権益や施設に対する戦闘を行う。そのためパレスチナのアウトサイドのワークと呼んでいた。

注2 S隊 隊長の名をとつてS隊とした。当時、赤軍派の軍には、隊長の下にいくつかの分隊があつた。その一つS隊のメンバーとしてSの指揮下で、バーシム奥平は赤軍派加盟の訓練を受けて海外へ出発した。

注3 よど号ハイジャック 1970年3月30日赤軍派によって敢行された。日航機よど号を乗っ取り、ピョンヤンに行き、朝鮮当局を説得し革命根拠地建設を目指すとした。

注4 國際根拠地路線 世界革命を実現していくためには、先進国のプロレタリアート、第三世界人民、社会主義的労働者国家(ソ連など)の3ブロックの階級闘争が一つになって帝国主義を打ち負かす必要がある。ソ連らは、その世界革命の根拠地の役割を果たしていない。我々が主導して國際根拠地を形成し、世界・日本革命を実現するという考えに基づく路線。その一つがよど号事件であり、アラブへの出発であった。

注5 ブント 共産主義者同盟の別称。1950年代、革命路線を巡って日本共产党と分裂し、60年安保闘争をラジカルに指導したのが共産主義者同盟。その流れを汲むブントの分派した一つが赤軍派。

注6 キブツ ヘブライ語。イスラエルで私有を否定した「社会主义的共同生活」で運営されていた農業や工業の労働者共同体。ユダヤ人の社会主义国を目指すものたちが編み出した。

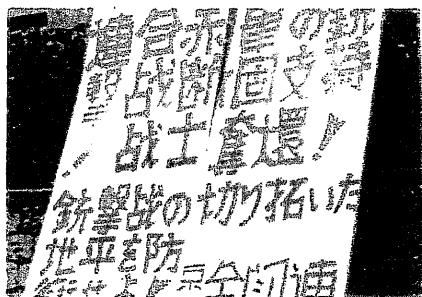
リッダ闘争 49周年—1972年と私

2021年4月17日 岩田晋郎

当年70歳、歳をとると何故か若い時の事が時々想い起こされる。

回顧談では無く、私の当時の情況を交えて関西の闘いの追想です。

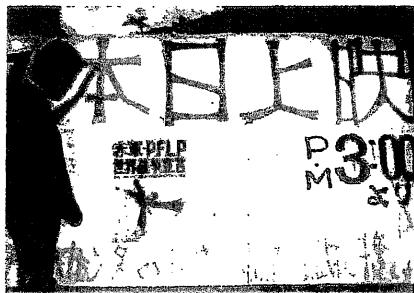
(1) 1972年と私



22歳であった。69年に高校を卒業し、69年1月決戦に参加し

た後、「遅れて来た政治青年」として政治運動を続けていた。ブント赤軍派革命戦線参加、しかし70年ほど号ハイジャックで革命戦線も解散した。その後雑誌『査証』発行を手伝い、72年2月連合赤軍「事件」に衝撃を受けた。軽井沢銃撃戦には支持を強く思い、その後の肅清(殺害)の発覚と森恒夫の獄中自殺は、さらなる衝撃であった。ただし、後に評論される「新左翼」の終焉觀は無かった。現に70年代は沖縄・狹山・三里塚闘争が新左翼によって継続され、赤軍派の分派闘争を含めて、ブントは集合離散が大々的に展開されていた。

(2) 映画「赤軍—PFLP 世界戦争宣言」の上映キャラバン



71年末から、映画「赤軍—PFLP 世界戦争宣言」の上映全国「赤バ

ス」キャラバンが行われた。関西で私が関わった

のは、龍谷大学、関西大学等であったと思う。主催はノンセクト系であった。予想を超えて、各大学で多くの参加者があった。連合赤軍事件以降の混迷から、ブント赤軍派系の学生運動は、ノンセクト系を串心に再建に向かった。マイナーであったが、73年以降「連合戦線」名で関大、龍谷大、近大、大教大の学生の活動があった。その活動は短命に終わったが、各々の活動家は、その後労働組合運動等で活動を持続して現在に至っている。これは、関西学生運動のさきやかな別物語である。

(3) 5・30 リッダ闘争



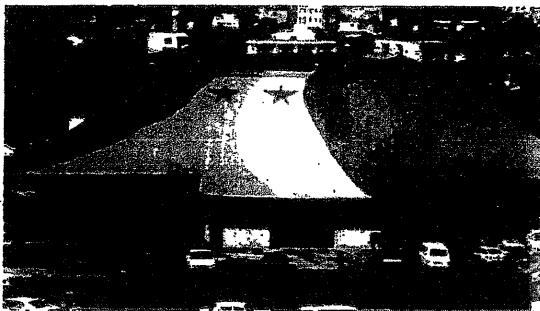
関西では、連合赤軍事件の閉塞感に対して、5・30 リッダ闘争は突破口に感じられた。奥平、安国さんが関西の大学出身であった事、そしてプロレタリア国際主義の実践として共感であったと思う。さらに、ブントの「世界革命戦争」と言うテーマ



が具体性をもって実証されたとも思えた。当時は、世界的な三プロック階級闘争の高揚と言う現実もあった。現在の大勢は「テロリスト」批判である。「テロリスト」云々には断固として反論して置く事も必要と思う。そして49年を経て「日本赤軍」も含めて、反省、総括は必要と思うが、私は「国際義勇軍であった」云々には違和感がある。

実際がPFLPとの関係でそうであっても、ブントの国際主義の実践と言う観点も必要と思う。少なくとも、当時はブントに留まらず「新左翼」は、国際主義の実践としてテルアビブ闘争に共感したと思われる。そして、今日でも国際連帯として国際主義の実践が問われている。

(4) 8・16 日本二戦士追悼国際集会(京都大学)



何故か、リッダ闘争後、京大のバリケード（教養学部）の中にいた。日の学生告訴、告発反対と同学会再建運動（再建同学会委員長八島久男）が盛り上がっていた。そして、今や無い京大時計台講堂で連日の同学会再建全学自治大会と並行して、8月16日パレスチナ人民・インドシナ人民連帯・日本二戦士追悼国際集会が、講堂を満席にして開催された。同日、農学部グランドで第2回原野祭（第1回は三里塚）も開催され、頭脳警察も登場した。主力は京大の教養部（C戦線）、工学部（T戦線）等の「赤ヘルノンセクト」であったが、同志社大、龍大等、関西の各大学からも参加があ

った。誰の発案か分からぬが、西部講堂の屋根を青い空、白い雲の上に赤いオリオンの三つの星を描くのを手伝った。いやに急な屋根であった。後日発行された『テルアビブ闘争支援委員会資料集』には、アラブ赤軍/アーデル同志/中野マリ子/上野勝輝/檜森孝雄/奥平純三/共産同赤軍派東京都委員会/共産同（RG）/労働者共産主義委員会のアピールが掲載されている。アピールの個人、組織はその後変転している。又『査証』N04、N05、『序章』9号にも二戦士追悼国際集会の報告が掲載されている。リッダ闘争49周年である。忘却されない為、追想、メモリアルも必要ですが、様々な限界があり、闘いの「意義」の再確認も求められていると思う。

私は、その後ブント赤軍派、日本赤軍とは別の道を歩む事になる。その端緒が「ディル・ヤシン作戦の総括と自己批判」（来見弘一V258『査証』N06）であった。

序章9



今問われる民衆の反撃を！—パレスチナ・映像・革命

—リッダ闘争49周年集会報告—

コロナ禍の今こそ問われる民衆の国際連帯

新型コロナウィルス(COVID-19)第3次緊急事態宣言が延長された5月30日に「リッダ闘争49周年集会」は渋谷ロフト9で定員の約半数60名の参加とオンライン参加で開催されました。

昨年はここ10年近く続いてきたリッダ闘争記念集会をコロナパンデミックの中止し、オリオンの会声明で、「新自由主義グローバリズムの国

境なき簒奪と抑圧、貧困格差、自然破壊がコロナパンデミックで露呈する中で、これに反撃する世界の民衆の国際連帯とブラック・ライブズ・マターをはじめとした国際的反レイシズム運動の高揚に連帶する。」と表明してきました。

来年2022年がリッダ闘争50年、重信さんの満期出獄、更には連合赤軍50年という節目の年の前年に当たる中で、私たちの直接のメッセー

ジを提供するために、ロフトのスタッフの協力もあり今年は中止だけは避けようと注意して集会開催を準備してきました。

折しも、2021年5月15日のナクバ（大破局の日）を前にして、イスラエル入植地をアーバーのように押し広げ、アメリカ帝国主義の容認の下に既成事実化しパレスチナの民族的抹殺を図ろうとするシオニスト＝イスラエルと自らの政権延命を企むネタニヤフ政権は5月10日からガザ地区に空爆を重ね多数の子供たちも含め250人余の犠牲者を生み出しました。オリオンの会は緊急抗議声明を出し、イスラエルの暴挙に抗議し、パレスチナ解放の闘いに連帯することを呼びかけました。

パレスチナ解放の闘いは継続している

現在パレスチナで起こっている現実と50年前の第3次中東戦争でイスラエルに全土占領されたパレスチナ民衆の現実は半世紀を経た現在も基本的には何も変わっていません。第2次大戦後なぜイスラエルという国が人工的に作られたのか、なぜパレスチナ人は国を追われ難民生活を余儀なくされ、ヨルダン川西岸とガザ地区に押し込められているのか。なぜイスラエル入植地が増殖し追認されているのか。オスロ合意による「2国家建設」と言いながら、パレスチナ自治区はイスラエル入植・追認によりスプロール化され、ガザ国境の壁には不斷に狙撃手がいてパレスチナ人に銃口を向け射殺しているのか、今回のガザ攻撃のきっかけとなった国連共同管理のエルサレムにアメリカ大使館移転を強行し、イスラエル入植地をアーバーのように増殖し、民族浄化攻撃を行い、直接にはイスラム教聖地拝礼をイスラエル軍にバリケードで阻止されたのか。こうしたパレスチナ問題の歴史的決着、いわば「落とし前」はついていないのです。即ち奥平、安田、岡本3戦士のリッダ闘争はまだ終わっておらず、戦闘継続中なのです。

日本の中山防衛副大臣が「心はイスラエルとともにある。」という発言にあるように日本政府はアメリカとともにイスラエルを支持し、結果的にパレスチナ占領、イスラエル入植を容認するばかりか、原発、ドローン技術など多様なイスラエルと



の提携を深めています。集団自衛権行使の安保法制や沖縄軍事基地強化、共謀罪などの治安弾圧の強化などと闘うことでもまたパレスチナ解放連帯の国境を越えた戦いに他なりません。

こうした思いは集会前に上映された「イスラエルのガザ攻撃」現認報告フィルムで表現され、50年の幅を表現しようとして、錯綜と混迷を率直に表出してしまった主催者挨拶の混乱に率直に反映していました。

現実の混迷を直視し、連帯の可能性を追求しよう！

宮台真司、廣瀬純、井上淳一、足立正生の各人が登壇して3時間に及ぶシンポジウムは「いまどうする？パレスチナ・映画・革命」と題されたものでした。このテーマは70年代の「赤P上映隊」と同じものでした。チエ・ゲバラの「2つ・3つのベトナムを」の呼びかけに連動するかのようなベトナム戦争勝利そしてフランス、ドイツ、アメリカ、日本などの青年・学生運動の高揚、中南米都市ゲリラ、プラハの春など1970年前後の革命的高揚といつてよいほどの政治的高揚は映画、文学、マンガ、音楽などの文化的高揚を伴ったものであったことを表現しています。情報や映像、個人情報が支配階級に篡奪され監視社会が日常化されようとしている今だからこそ、「世界の全体性を映像や音声を通じて民衆が知覚する」（ダニエル・コーンベッティ）現代の民衆闘争の一翼としての表現活動について、会場参加者も含めて自由な討論が期待されました。

「パレスチナフェミニズム－女性解放なしに民族解放なし、レアメタルなど希少物質をめぐる南北問題」などを問題提起した廣瀬さん、「9・11を契機に変化したことに表現者はどうかわかったのか、現在の映画表現をいかに観客－民衆に届け

「ことができるのか」などをコロナ自粛、観客動員数などを例に語った井上さん、シュールアリアズムの表現者としての出発と異議申し立ての表現について語った足立さん、宮台さんからは「クズ人間ばかりの世の中で、焚火を囲む中からしか展望は生まれない」などとシニカルで衝撃的な発言が続きました。廣瀬さんから「なぜ直接突入するような戦いをしないのか」井上さんから「映画という自分で責任を持つる範囲からの異議申し立てを組織する。」などという具体性を求める発言もありました。

総じて発言が交差することもなく、結果として言いっぱなしという「運動は一度途絶えると続かない」という現実を反映するシンポジウムのまま時間が過ぎていきました。主催者として自由な発言を尊重するとともに、表現活動の現在への切込みは可能かというテーマ設定へのアプローチが不十分であったこと、逆にそれぞれの発言者に欲求不満を生じさせたかもしれないことを反省します。

今回の企画は会場とのキャッチボールを重視したものとして設定しました。しかし内容は乏しいもので、若者からの自己と状況との関係が見いだせないという質問や、6.8年の状況を若者たちにどう継承していくのかという質問、釜ヶ崎から「若者たちは着実に社会に関心を示している」という実際報告などがあったが、登壇者とのキャッチボールには至らず、すれ違いのまま、むしろ混沌を反映する質疑応答に終わりました。

私たちはこうした現実を謙虚に受け止めるところから、来年2022年を迎えるということを再確認した「5・30リッダ闘争49周年集会」でし

た。

オリオンの会は1972年5月30日、パレスチナ解放人民戦線(PFLP)との共同作戦で、イスラエルの心臓部—テルアビブ・リッダ空港攻撃闘争を闘い戦死した奥平剛士、安田安之、そしてイスラエルに逮捕・拷問され、現在レバノンに政治亡命している岡本公三君たちの闘いを検証し、更に現地で岡本公三さんの生活・医療支援をしている人たちへの支援活動として「岡本公三支援基金」を運営している有志の集まりです。2013年に再編成されてからは、毎年リッダ闘争記念集会を開催しています。

この報告は、オリオンの会としての全体報告ではなく、会の一員として個人的報告となります。そのためシンポジウム発言内容に事実誤認があるかもしれませんことを断っておきます。

文責 オリオンの会 大越 輝雄

153号の誤植の訂正とお詫び

2頁左から4首目 冬の庭→冬の夜

6頁左列5行目 2020年→2021年

8頁左列下から2行目 一日を→一日と

11頁右列 1月30日の日誌の1行目 舞う→トル

12頁左列下から15行目 事業料→授業料

12頁左列下から6行目 東洋大→東洋大OB

13頁右列上から10行目 かんこく→トル

15頁右列上から4行目 させる。→させる道である。

15頁右列上から17行目 「鉄壁戦略」→「鉄の壁戦略」

16頁 正誤表の最後 「大儀」という→「大義」という

後記

「オリーブの樹」今号の発行が大幅に遅れ、皆様にご心配かけ、誠に申し訳ありませんでした。心からお詫び申し上げます。

私が体調を崩し、まわりの方々から、まず体調を整えることを優先せよと、優しい気遣いと暖かいお言葉と様々なご支援を受けることに甘んじてきました。

発行を今か今かとお待ちいただきました読者の皆様そして重信さんへ、154号の発行をこのように大幅に遅らせましたこと、重ねて深くお詫び申し上げます。(Y)

重信房子さんへの郵送アドレス 〒196-0035 東京都昭島市もぐせいの杜2-1-9 重信房子

連絡先 〒105-0004 東京都港区新橋2-8-16 石田ビル5階

救援連絡センター一氣付 「重信房子さんを支える会」

郵便振替 00110-4-613941 オリーブの樹

領布価格 500円